2019年　埼玉大会　　「絵本の中の障がい児・者」

2019年8月4日

神奈川県:横浜支部　長塚淑江

１．はじめに

退職後、障がい者のグループホームや障害者地域活動ホーム（横浜市地域活動支援センター事業デイサービス型）でパートとして仕事をしている。その中で、「障がい者が地域で生きるとはどういうことか」（一方で、自分は地域で生きているのか）が常に頭の中にある。

結論から言うと、2016年施行の障害者差別解消法や2020年東京パラリンピックに向けて環境整備…などが時々に報道されることがあるが、宙に浮いているような感じにしかとらえられない自分がいる。障害者が地域で自然に暮らしているようにはとらえきれないからだ。

では、どうしたらよいかとなると、これだっという解消法、改善策は浮かんでこない。日常の中で地味にコツコツと触れ合ったり、知り合ったりすることが最善かなというのが現在の心境だ。知らないから恐れたり敬遠したり差別したり無関心だったりするからだ。

では私のように日常的にそばに対象となる方々がいない場合はどうやって知るか？と考えた。テレビで、インターネットで、新聞や雑誌、本などからというのが一般的だろう。最近は映画という手段もある。

テレビでは、Eテレの番組「バリバラ」（木曜日20:00）や「ハートネットTV」（月～水曜日20:00）などがわかりやすいと思っている。新聞にも時々記事が出る。次は本だ。
そこで、自分自身も好きだし、小学校教員として授業でも使ったことがよくある絵本（児童書）において、「障がい児・者」は、どのように描かれているか、図書館で調べてみた。まだ全ての絵本に出会っているわけではないが、その一端を紹介したい。

２．絵本（児童書）探し

（１）方法

① ２か所の図書館（金沢図書館・横須賀北図書館）で、タイトルを手掛かりに手当り次第に読んでみた。また、そうして見つかった本のカバーや作者紹介で載っている本を探した。（ななめ読みのものもある。従って図書館の本の全てを網羅していない。）

② 本の紹介をしている本を読んだ。

- 『どの本よもうかな　1900冊』（日本子どもの本研究会、国土社、1986年）
- 『続どの本よもうかな　1900冊』（日本子どもの本研究会、国土社、1998年）
- 『おもしろい本をさがす本』　（全国学校図書館協議会　1989年）
- 『キラキラ読書クラブ　子どもの本（644冊）ガイド』
  （キラキラ読書クラブ:編、日本図書センター、2006年）
- 『キラキラ読書クラブ　子どもの本（702冊）ガイド』

（キラキラ読書クラブ:編、玉川大学出版部、2014 年）
・『新どの本よもうかな』　（日本子どもの本研究会、国土社、2011 年）
・『新どの本よもうかな　中学生版』　（日本子どもの本研究会、金の星社、2014 年）

（２）内容

読んでみた絵本・児童書はまだ少ないが、どんな「障害」が取り上げられているかというと、①視覚障害　③聴覚障害　③肢体不自由　④知的障害　⑤自閉症　⑥（しばしば障害のある子と似たような状態が見られる）被虐待やどの教室にもよくいる”ちょっと困難を抱えている“、などに分類できる。多いのは①～③の身体障害児・者を取り上げた本だ。

写真によってその子の生活を取り上げているもの、実話や自伝、創作などがある。多くの作品は、美化もしていないし、祭り上げていることもなく、淡々とでも温かい目で障がい児（者）のことを教えてくれるように私には思える。また、どうやって一緒に勉強したり生活したり、遊んだりしたらよいかということも教えてくれる。

３．大学で

神奈川歴教協がこの２～３年、横浜国立大学金馬国春先生のゼミや授業で「ミニ授業」や歴教協の紹介をさせていただいている。今年は現役の中学の教員と私がゼミで 45 分ずつ、退職教員・現役２人の中学の教員が授業で 20 分ぐらいずつ「ミニ授業」を行った。

私は、11 人のゼミ生を前に行った。以下の流れで実施した。

（１）　今まで障がい児・者のことを学んだり接したりした経験などがあるかを中心に学生に自己紹介してもらう。
　　⇒子どものころから身近なところにいた人、まったく接点がなかった人、小学校などで学習した人など
（２）　私がこのレポートの１．のようなことを話す。
（３）　学生は、15 分間私が持ち込んだ 10 数冊の絵本を手に取って読む。
（４）　学生が、１冊の本を選んでその理由を書く。何人かには思いを話してもらう。
（５）　最後に、「障がい者と自分」（あるいは感想）を書き、話してもらう。
（６）金馬先生の話

以下、学生が書いたものを紹介する。

社会思想史演習(金馬先生)　　2019 年５月 23 日

★★　選んだ本のタイトルと選んだわけ　★★

Ａ　『ボクはじっとできない』（バーバラ・エシャム:作、マイク＆カール・ゴードン:絵、岩崎書店）

…ADHD という言葉は高校生までなんとなく聞き覚えのあるものでしたが、大学生になって、いろいろな知識を学びました。「じっとしていられない」状態が続いてしまうことを

ADHD と定義するのであれば、身近に存在しているようにも思えます。学級経営の観点からも、ADHD について学びたいと思い、この本にしました。

B　『千曲川のほとりで～私の学童疎開、上山田ホテル～』（今西美奈子:作、金山崇:絵、真心の集い社）

…戦争期に学童疎開が行われていたことは知っていたが、障害者の子どもがどのようにして疎開していたのかは気にしたこともなかった。全員が戦争期で大変な時期に、さらに配慮が必要な障害者に対して周囲が心配りを出来ることが素晴らしいことだと感じた。

C　『わたし　いややねん』（吉村敬子:作、松下香住:絵、偕成社）

…こんなにストレートな障害者の思いを聞いたことがなかったから。「強い心を持つ」というのは誰にとっても難しいことのはずなのに、お互いに弱さ認め合えたら生きやすい世の中になるのかなと感じたから。障害者が外に出るとジロジロと見られることが今でも多くあるなと感じた。手足に障害を持つ人の本。昔の本なのに今と何ら変化していない。

D　『自閉というぼくの世界』（東田直樹:作、井村禮子:絵、エスコアール出版）

…自分のおさななじみが自閉症で似たような言動を見たことがあるから。彼らなりの考えがある。歩みより。

E　『自閉というぼくの世界』（東田直樹:作、井村禮子:絵、エスコアール出版）

…障害者についての本や絵本には、割と他者から見た部分が書かれていることが多い気がする。しかし、この本は、自閉症の子ども本人の気持ちが書いてあり、本人が書いているという、なぜ多動をしてしまうのかというのがとても理解できた。

F　『かっくん』（クリスチャン・メルベイユ:作、ジョス・ゴフィン：絵、乙武洋匡:訳、講談社）

…最後のページの「その日から、みんなのかっくんを見る目がかわりました。そのほかはなんにもかわっていまえん」という文章が印象的だった。まるがあたり前の世界、異質なものを矯正・排除しようとしてしまう人、様々な人がいると思うが、できないこと、ないものを見る目ではなく、得意なもの、豊かな発想に気がつける人になりたいと感じた。視点１つで人の捉え方は変わる。

G　『みえるとか　みえないとか』（オシタケシンスケ:作、伊藤亜紗:相談、アリス館）

…人間が宇宙でいろいろな宇宙人に出会うことで、それぞれの違いがあたり前のことなんだ、人それぞれなんだということがよく伝わる本だと思ったから。実際の障害者とアウト自分と違うことに恐さを感じてしまったり、変だと思ってしまうこともあるけど、そのことについても分かりやすく描いてある。

H　『わたしたちのトビアス』(セシリア・スベドベリ:編、偕成社)

…新しい家族が生まれることに期待をふくらませていた。そこに生まれた赤ちゃんが障がいをもっていることを知った直後の家族の心情と、その後の生活の中で障がい者に対する考え方が変化していく様子がわかる内容だった。(今回の内容はダウン症)障がいをもつ人たちとの接し方等、自分の経験と重なるところがあった。

I　『ふしぎなともだち』(たじまゆきひこ:作・絵、くもん出版)

…自閉症の子どもを中心とした話を見るのが初めてだった。どんな障害を持った子にも共通することだと思うが、心から寄り添ってくれる友人がいることはすごく大切であると思う。たった 1 人でもいいから、真にその子を理解している子が必要。そうすれば勝手に障害を持った子も心を開いてくれる。

J　『えほん　障害者権利条約』(ふじいかつのり:作、里圭:絵、汐文社)

…障害者権利条約という国連の国際条約を絵本という形で表すということに興味を持った。日本が条約に批准したのが 141 番目の遅さであるとあったが、その理由が障害者団体が導入するまでに活動をおこなうためだということを学んだ。

K　『きらわれカラス』(伊藤秀高：作、赤司ケイコ：絵、大日本図書)

…1 つ目にのっていた「お母さん」という詩にひかれ、読んでみようと思ったから。詩を読む中で、彼の直筆の文字から様々なことを感じて、この詩は、私には書けないなと思った。言葉の使い方が独特で、綺麗な詩だなと感じた。あとがきで書かれていた文章も、どうにかして伝えよう、というのが伝わってきた。「きらわれカラス」という詩の、“ぼくは、きらいじゃないよ。きみがカラスだってこと認めているから”という文言に胸を打たれた。今までこのように考えたことはなかったし、なんでカラスは嫌われちゃうのかなと疑問に感じた。また、「ジャガイモ君」という詩で、“ジャガイモ君、君は我慢強いね　真っ黒な土の中にいて　君は、泥だらけで黒く少しみっともないけれど　とくに甘くも辛くもなく　君はとってもおいしいよ”自分と違うものを受け入れる土壌。

★★★　障がい者と自分　&　感想など　★★★

A　障がいを持つ、持たないに関わらず、自らの課題に気づき、自分で自分を管理する方法を発見することが大切である。なんとかしたいと思っている児童に対して、教師が個性として捉え、彼らの歩みに応じた環境作り、接し方を探っていきたい。その根本として、自分と違う、知らないから受け入れない態度はもったいないというお話は勉強になりました。

B　障害者についてあまり知らないと意思疎通の出来ない人間という印象しか持てないのではないかと思う。知っていると、自分と違う一人の人間として関わっていけるのではない

だろうか。実際に係った経験が無いと上手に付き合っていくことは難しいことだと感じる。関わることで生じるすれ違いを恐れず、積極的に交流をしていくようにしたい。

C　自分と違うことを受け入れるということ、知らないから知ればいいということを、また変な意味での特別扱いをするのではなく、するべき配慮を行うということが出来るようになれば良いなと考えました。そういった環境づくりを社会側からしていかなければいけないと感じました。

D　自身の友人との体験と絵本を重ね合わせることでより自閉症についての理解が深まったと感じている。自閉症の子も私たちと同じ人間なので異世界の人だと思うのではなく心から向き合い互いに歩み寄ることが必要だと感じた。

E　障がいのあるこどもによりそう、ということできていても、なぜこの行動をとってしまうのかが謎でしかなかった。このような絵本・本とふれあうなかで、小学校低学年のうちからこのようなものにふれるのは、とてもよいことだと思う。さらに、これから特支学校での実習もひかえているため、自分なりに学習して知識を得るということをしていきたいと思った。

F　私は、これまで障がいを持つ子と、多く関わりを持ってきた方ではないと感じる。特別な偏見を持っているわけではないが、いざ目の前に障がいを持つ子どもがいた時、どのように対応したらよいのかわからないというのが本音のような気がした。現在、毎週中学校に行く機会があるのだが、普通級の中で車イスの男の子がいるクラスがあった。学級の中でお互いにサポートし合っている子どもたちの姿がとても印象的だった。

G　違うことが当たり前という意識を広めていけたらいいのに。たくさんの人々にふれあえばその意識を持つこともできる。自分と違う人との交流をもっと大切に、そして積極的にするようにしていきたい。絵本もその意識をもつことのきっかけになるなら、子どもたちにもたくさん読ませてあげたいと思った。もっと相互理解できる人格づくりできる環境をつくっていきたい。

H　自分の小さいころの体験から障がい者に対する不安があったけど、学部生時代に学んで介護等体験を通して、彼らの考え方(コミュニケーションとか)が少しずつわかるようになって、なんなら私たちより表情が豊かで素直だと感じました。みんなが彼らのことを知り、受け入れて理解していくことが大切であると思います。人にも多様性があることを知ることが大切。

I　ただ「障がい者」と聞くと先入観で、少し仲良くなりづらいというイメージがあった。しかし、絵本で伝わってきたのは、「障がい者」も普通の人として暮らしたい、特別扱いしてほしくないということだった。確かにそうだろうなと思ったし、今まで自分がやってきたことはひどいことだなと感じた。小さな事でいいから、少しでも障害者が生きやすい世の中になるように、努力したいと思う。

J　自分と違う者を知らないから受け入れないという実情が残念に感じた。条約や法律といったハードウェアの面から整備が進んでいても、まだまだ人の心のソウフトウェアな面は改善できていないと思う。

K　昔、自閉症の子どもと必死に生きる姿を描いた「光とともに」という漫画をよく読んでいた。来週、特別支援学校での体験があるが、その学校も主に自閉症の子がいると聞いた。彼らは、私たちと比べると劣る点もあるかもしれないが、逆に彼らは私たちにないものを持っている（感性など）。そこに気づいてあげること、生かしてあげるようなことが大切なんだと思った。

【金馬先生より】
働くことの意義や親へのインタビュー、子育てなどについて学ぶ。差別・格差・貧困について学んでいく。テキストは、『私をひらく社会学』

【やってみて】
　学生たちが短い時間ではあるが真剣に絵本を読んでいる姿を見ていたら、（久しぶりの）絵本から新しく何かを読みとっているように思えた。誰もが障がい児・者とすぐ接することはなかなか難しいのかもしれないが、絵本の中で「出会う」ことなら容易にできるだろう。それを小・中・高校などでもできたらいいなと思う。

４．課題

① まだまだすべての絵本（児童書）には出会っていないので、今後も探っていきたい。
② いくら絵本（児童書）がわかっても、実際に子どもたちが手に取って読んでくれなければ意味がない。実際に学校で、あるいは家庭で子どもたちが「読む」ということをしてほしい。現役を退いているので、接点がほとんどないのが現状。
現役の学校教員に大いに絵本等を活用してもらいたいと思う。
③ 絵本に表されていない「障害」はないか。とはいってもすべての障害は、同じ障害名がついていたとしても一人ひとり違っているので、そもそも「網羅」することは不可能だが。性的マイノリティや虐待などについて言及している絵本や児童書もあるので、それらについても見ていく必要がありそうだ。

④ その本に触れることでどのくらい「障害児・者」への理解ができるのかはわからない。本だけからストーンとわかることにはあり得ないので、まずはとっかかり(はじめの一歩)としての位置づけだ。

⑤ 映画にも可能性がある。数少ない私が見た映画では、以下のようなものがある。

- ぼくは海がみたくなりました……自閉症の青年
- 真白の恋……軽度知的障害の女性の恋心
- ワーカーズ……東北大震災後の復興の中でも障害者が活動
- 道草……支援を受けながら自立：一人暮らしをする。
- 星に語りて……3・11 前後の東北における障害者施設
- レインマン……自閉症の青年（ダスティ・ホフマン、トム・クルーズ主演）
- 夜明け前……精神障がい者私宅監置と精神科医呉秀三
- ぼくと魔法の言葉たち……ディズニー映画で言葉を覚えた自閉症児
- いろとりどりの親子……ダウン症や自閉症など 6 組の親子
- アイ・アム・サム……知的障害の父親の子育て
- イーちゃんの白い杖……全盲の姉と重度障害・全盲の弟。命の大切さ。
- えんとこ……肢体不自由の遠藤さんのいるところ
- 子どもが教えてくれたこと……病気の子ども達が毎日を精一杯生きている。
- だってしょうがないじゃない……発達障害の叔父を ADHD の監督が撮る
- 種をまく人……ダウン症

観てないが…

- シンプルシモン……アスペルガー
- 自閉症のぼくが「ありがとう」を言えるまで……自閉症
- 奇跡の人……ヘレンケラー
- マラソン……自閉症青年とランニング(韓国。テレビ版では、嵐の二宮主演)
- タケオ……ダウン症のドラマー
- やさしくなあに……てんかんと知的障害の奈緒ちゃんと家族の 35 年間
- 志乃ちゃんは自分の名前が言えない…喋ろうとすると言葉に詰まってしまう
- ゆうやけ子どもクラブ……東京小平。障害のある子どもの放課後を支援する活動
-

資料編……方法②の一部紹介……

どの本よもうかな　1900 冊　（日本子どもの本研究会　国土社　1986 年）

＜幼児向き・小学校下級向き＞

●1　**かたあしだちょうのエルフ**（作・絵：おのきがく、ポプラ社）

たくましい体と速い足を持つだちょうのエルフは、子どもたちを守るためにライオンと戦い、片足になる。いつしかエルフは忘れられ，老いと孤独の中で死に直面しながら生きる身に。しかし、クロヒョウの前に立ちふさがり、敢然と子どもたちを守って 1 本の木と化す。

●2　**えっちゃんのあけた青いまど**（著：岸武雄、絵：宮本忠夫　新日本出版社）

ろう学校 1 年生の少女の空想を美しく描く。粉雪の舞う朝、揺れる満員バスの中、おとなのずぼんにつかまった手は打ち払われる。やっと柱につかまって安心したえっちゃんは、いたずらがしてみたくなり、窓ガラスに丸い窓をかく。そこから回想と空想の世界に入る。仲良しの鳩と遊ぶ。アリガトーの勉強はうまく言えない。やがてｒ、げんじつにもどり「ミナサン、アリガトー」の声を残してバスを降りていく。えっちゃんの開けた窓は、明るく広い。

●3　**からすたろう　（やまし たたろう：文:絵、偕成社）**

いつも目立たず、クラスの子どもたちともうちとけず、ひとりぼっちの少年チビの物語。しかし自然の中では、のびのび行動的な子ども。6 年生になり、初任の先生はチビを理解し、学芸会に「カラスの鳴き声」を発表させる。夜明けとともに家を出て、日没に家に帰る厳しい 6 年間がみんなにわかる。さびしい山奥から一人で学校へ通う「からすたろう」の生活を感動的に描いた版画絵本。作者の子ども時代の思い出を美しく描いた絵本。

●4　**50 点先生と 27 人の子どもたち**（作:エリザベス・シェティーメル、絵：宇野文雄、さ・え・ら書房）

西ドイツの小さな町の学校の女の先生が、クラスの 27 人の子どもたちのエピソードを綴る。50 点先生の理由は女の子の髪の毛を束ねてあげることができないから。フランクは体が不自由だが、他のこと同じように体育もやり、特別視されることがない。

●5　**先生、さくら子わかってね**　（鈴木喜代春：作，阿部：絵、学校図書）

3 年生になって浅川あき子先生が担任になったさくら子はうれしくてたまらない。先生の好きな花やチョコを持っていき先生に文句を言われる。知恵遅れの子の純粋な心情を温かく情感豊かに描いた作品。

続どの本よもうかな？　1900冊　（日本子どもの本研究会　国土社1998年）

●1　**クイールは盲導犬になった（こわせたまみ:文、秋元良平：写真、ひさかたチャイルド、1992 年）**

盲導犬の適性をもったラブラドール・レトリバーの子犬、クィールの出生から盲導犬として生活を始　めるまでの記録の絵本化である。宇:間れて間もなく人のあたたかさの中で、人間の子どものように可愛がられて育ち、訓練所の生活でクィールはしつけられる。視覚障害者の目となり足となり、心の目にまでもなって宇寄り添う働きには人もおよばぬ能力と絆がある。心の美しさ、ものいう目が静かに深く伝わってくる。モノクロームの写真が見事。

●２　さっちゃんのまほうのて　（たばたせいいち、先天性四肢障害児父母の会他、共同制作。偕成社、1985 年）

さっちゃんは幼稚園のままごと遊びでお母さんになりたかった。まりちゃんに「さっちゃんなんてお母さんになれないよ！」と言われて、園を飛び出し、次の日から行かなくなってしまった。弟が生まれた日、お父さんに心配事を話した。お父さんには、さちこはりっぱなお母さんになれる、そしてさち子の手はふしぎな力の伝わってくるまほうの手だと話してくれた。四肢障害児のゆれ動く内面を温かく
描いた絵本。

●３　とべ！　ゆうたろうトンボ　（金田喜兵衛：作、阿部肇：絵、ひくまの出版、1986 年）

体が弱く、うまく歩けないゆうたろうにできることは、竹トンボ作り。その羽は空が透けるほど薄く、美しい。遊びに来る村の子どもたちに一つずつあげ喜ばれていた。ところが、「もう来れない、病気がうつると家の人に…」と聞かされる。あきらめず、竹トンボを作り続けて 200 日。村を見下ろす大岩にやっと行き、友達に届けと飛ばし始めた。千、二千…そしていつしかゆうたろうも夕焼け空へ一。

●４　ベルナの目はさなえさんの目　（郡司ななえ・織茂恭子:作、童心社、1996 年）

ななえさん夫妻は視力障害者のカップル。大人になって視力を失ったななえさんには、子どもを育てる自信がなく彌病んでいた。しかし、夫のすすめで盲導犬と暮らす決心をし、大嫌いだった犬との訓練が始まる。盲導犬ベルナとの出会いから、訓練の様子や、心が通じ助け合って生活できるようになるまでの失敗などが、やさしい言葉と絵で語られていく。幼い子どもに、盲導犬の役目などを伝えてくれるコラージュの画面が映える絵本。

■１　雨のにおい星の声　（赤座憲久:文、鈴木義信:絵、小峰書店、1987 年）

目の見えない子どもたちの、つぶやきや作文、詩をうけとめた盲学校で、教師をしていた作者がコーディネートした絵本。どしゃぶりの雨のにおいは「土」くさく、バラの匂いは「毛糸のセーター」や「フルートの音色」「リンゴの芯」と、豊かに表現するその言葉はまさに詩そのものである。色づかいの見事な絵が、文をさらに印象づけてくれる絵本。

■２　アリーナと風になる　盲導犬アリーナ物語（エム・ナマエ：文、夏目尚吾:絵、アリス館、1996 年）

ぼくは、失明してから一人で点字やコンピュータを習って童話作家となる。外出ができな

いでいるところへ盲導犬アリーナがきて、ともに生活するようになる。アリーナと心を一つにして外を歩く時、僕は風になり、、町が後ろへととんでいくような心地よさを味わえるようになる。奥さんの協力を得て、アリーナのしつけも、盲導犬としての訓練も、厳しい中にも愛情をこめたおこなう。作者一家の楽しい１日の生活を描く。

おもしろい本をさがす本小学生版（全国学校図書館協議会　1989 年２月）

【進歩につくした人びと】

＜愛の尊さを教えた人びと＞

■１　ヘレンケラー自伝:三重苦の奇跡の人　（ヘレンケラー:著、今西祐行:訳、講談社、1988 年）

この本はヘレン・ケラーが自分の小さいときの思い出を、自分の思いも加えて書いたもの。ヘレンは 1880 年６月 27 日アメリカ合衆国アラバマ州の小さな町で生まれました。両親のはじめての子どもだったのでみんなにとても祝福されました。発育もよく生後 6 か月で話し始めたほどでした。ところが 1 歳になったとき、重い病気にかかり、三重苦を負うことになったのです。大きくなるにつれてわがままになり、気に入らないことがあるとすごく暴れるようになりました。このようなヘレンを救ったのがサリバン先生でした。1904 年にラドクリフ大学を卒業し、身体障害者のために尽くすようになりました。

＜すばらしい生きかたを考えてみよう＞

■２　エジソン　（崎川範行：著、講談社、1987 年）

頭の大きないたずらっ子、小学校を途中でやめたエジソンは 84 歳で亡くなるまでわたしたちが想像もできないほどの多くの物を発明しました。電灯、蓄音機、映画、蓄電池、タイプライターなど、世の中の人の幸福に役立つものばかりです。メンロパークの魔術師と言われたエジソンはどんな少年時代を送ったのでしょうか。天才とは 1%のひらめきと 99%の努力であるといっているように、彼は暇があれば図書館通いをして多くの本を読み、実験に実験を重ねました。数多くの発明は、失敗と努力の積み重ねで作り出したものばかりなのです。

【人間の生きる姿】

＜人間の生きかたを考えてみよう＞

■３　名もなき人びとの伝記　（家井萌二:著、大日本図書、1986 年）

鈴木さんは両眼が見えません。それでも立派な画家になったのです。その陰には奥さん献身的な協力と、鈴木さんの涙ぐましい努力があったのです。

＜体や心の障害を乗り越えて生きる＞

■４　生きていくこと　（槻野けい:作、講談社、１９８５年）

陽子が４歳の時、弟の進が生まれました。現在陽子は小学５年生。体も大きくて運動も得意な、活発な少女です。弟は 5 歳になってもおしめを当てています。歩くこともできません。進は、背椎破裂という病気で、生まれてすぐに大手術をして上向きに寝られるようになったのです。今度は歩けるようにお母さんは毎日進をおぶって遠い病院へ訓練に

通っています。近所にも同じ団地に住む脳性小児マヒの光夫や、脳水腫の用品屋の息子がいました。陽子は進はなぜ歩けないのか、考えます。過労で倒れたお母さんの代わりに背負って病院に通い、そこで補装具をつけて懸命に歩く練習をしている弟を見て、声援を送ります。

【金沢図書館所蔵】

キラキラ読書クラブ　子どもの本 644 冊ガイド

キラキラ読書クラブ：編　　日本図書センター　2006 年２月

＜きょうだい＞

●１　ぼくのお姉さん　（丘修三：文、かみやしん:絵、偕成社、1986 年）

ぼくのお姉ちゃんはダウン症です//

あなたのお姉さんは、どんな人ですか？　作文の宿題で自分のきょうだいのことを書かなくてはならないとき、あなたはだれのことを書きますか？　ぼくのお姉ちゃんは、ダウン症です。17 歳になるのに、あかんぼうのようにしか話せません。満足にひらがなも読めないし、賭けるのは、自分の名前くらい。数の計算はまるでダメです。お姉ちゃんはこの春から福祉作業所につとめ始めました。朝の９時から夕方の４時半まで、紙の箱を折る仕事です。

＜手紙＞

●２　もちろん返事をまってます　（ガリラ・ロンフェデル・アミット：文、安藤由紀:絵、母袋夏生:訳、岩崎書店、1999 年）

ふたりは特別な友だちになれました//

11 才の女の子ノアは、文通をはじめました。あいてはようご学校にかよっている同い年の男の子ドウディです。ノアは手紙に、学校のこと、家族のこと、そして自分の考えをまっすぐな気持ちで書きました。ドウディも自分の障害のことや、家族に心配をかけてつらいことなどすなおな気持ちを書いた返事を出します。ふたりは手紙を通じて特別な友だちになれました。でも「会いたい」というノアに、ドウディは返事が書けません。車イスにのっている自分の姿を見て、ノアがどう思うか心配でならないのです。

＜心のなか＞

●３　夜中に犬に起こった奇妙な事件　（マーク・ハドソン：文、小尾芙佐:訳、早川書房、2003 年）

どんな気持ちでいるかを知るのはむずかしい//

クリストファーは、世界中の国の名前と首都の名前、それから 7507 までの素数も、全部知っています。でも、人がどんな気持ちでいるのかを知るのはむずかしい。悲しい表情や、しあわせな表情をあらわす図形を見て考えます。先生が、自分の読みたいものを書きなさい、と言ったので、クリストファーは殺人ミステリ小説を書き始めました。

自閉症のクリストファーの心の中がよくわかる物語です。

キラキラ読書クラブ改訂新版　子どもの本７２０冊ガイド

キラキラ読書クラブ：編　　玉川大学出版部　　2014 年 11 月

＜きょうだい＞

●１　ぼくのお姉さん　（丘修三:文、かみやしん:絵、偕成社、1986 年）

ぼくのお姉ちゃんはダウン症です//

あなたのお姉さんはどんな人ですか？作文の宿題で自分のきょうだいのことをかかなくてはならないとき、あなたは、誰のことを書きますか？僕のお姉ちゃんはダウン症です。17 歳になるのに、あかんぼうのようにしか話せません。満足にひらがなも読めないし、書のは、自分の名前くらい。数の計算は、まるでダメです。お姉ちゃんは、この春から福祉作業所に勤め始めました。朝の９時から夕方の４時半まで、のようにしか話せません。満足にひらがなも読めないし、書のは、自分の名前くらい。数の計算は、まるでダメです。お姉ちゃんは、この春から福祉作業所に勤め始めました。朝の９時から夕方の４時半まで、紙の箱を折る仕事です。

＜おとうさん＞

●２　おとうさんの手（まはら三桃：文、長谷川義文：絵、講談社、2011 年）

見えなくても、においでわかるんだよ//

お父さんは、目が見えません。でも、わたしがかえってくると、すぐにわかります。「どうして、わたしだってわかるの？」ときいたら、においでわかるんだよって、教えてくれました。おとうさんは、家で「はりちりょう」をしています。おとうさんのては、まほうのように、かんじゃさんのせなかにはりをうちます。かんじゃさんは、きもちよさそう。おとうさんは、天気予報の名人です。雨が降るときは空気がおもたくなるから、すぐにわかるんだって。

＜手紙＞

●３　もちろん返事をまってます　（ガリラ・ロンフェデル・アミット：文、安藤由紀:絵、母袋夏：訳、岩崎書店、1999 年）

ふたりは特別な友だちになれました//

11 歳の女の子ノアは、文通を始めました。相手は、養護学校に通っている同い年の男の子ドウディです。ノアは手紙に、自分の考えをまっすぐな気持ちで書きました。ドウディも、自分の障がいのことや、家族に心配をかけて辛いことなど、すなおな気持ちを書いた返事を出します。ふたりは、手紙を通じて特別な友だちになれました。でも、「会いたい」というノアにドウディは返事が。書けません。車イスにのっている自分の姿を見てノアがどう思うか、心配でならないのです。

2019 年　歴教協埼玉大会　　第 21 分科会

◇絵本の中の障がい児・者◇

神奈川歴教協横浜支部　　長塚淑江